

終戦70年 体験を語る

⑥

終戦から70年。戦争体験者も高齢化し語れる人も少ない。当時子どもだったという世代は、おぼろげながらも記憶にとどめている。その記憶をたどって、子どもの頃に体験し今も強く心に残っていることを、3人に聞いた。

父戦死の知らせに 母は花瓶を落とし泣き崩れた

滋賀県高島市・杉生慶道さん



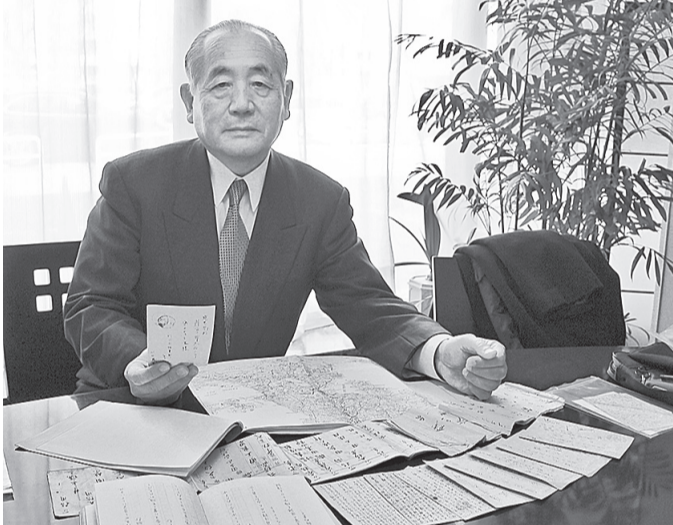
父は陸軍に入隊。昭和4月にセブ島で戦死し、和19年1月にフィリピンに帰国しました。大阪の堀川国民学校 男女57人がお寺にいた

20年5月のことです。今もはっきり覚えていいます。私は郵便配達員さんから手紙を受け取り、本堂にいた母に手紙を渡しました。阿弥陀さんへのお花を供えようとしていた母は、その花瓶を落として泣き崩れ、「お父ちゃん、なんで死んだんやあ」とひざを何度もたたいていました。その手紙は、父の戦死の通知でした。その晩、私と妹をお風呂に入れてくれた母が泣いていたのを昨日のこのように覚えていてます。疎開を受け入れ、気丈に振舞い、子どもたちの世話に奮闘していた母でした。しかし、心の底はどんな気持だったんでしょうか。「お父ちゃん、なんで死んだんやあ」の声を思い出すたびに戦争を思い出し、身震いしてしまいます。

母は平成14年に亡くなりました。遺品を整理していると、大切に残していた父からの手紙が出てきました。結婚して間もなく出征した父は、母を思い、心を強く持って生活するかせたり苦しませたりしたのとは私一人ではなく、あの時代はたくさんおられたし、これが戦死したという紙が入った木箱だけが帰って来ました。村を上げて地を売ったり、縫製の仕事をしながら家計を支えてくれました。年末になると「除夜の鐘がないのでしょう。父が撞き終わるまでに届の手紙には「大いに戦物をしなくては。いう覚悟であります」と

年末になると口にした 母の言葉が耳から離れない

神奈川県厚木市・山口格夫さん



昭和19年、宮崎県の専売公社に勤務していた父に召集がかかりました。そのため、母と私たち兄弟3人は祖父が暮らす鹿児島に疎開しました。父は終戦直前の昭和20年7月にフィリピンのルソン島で戦死したそうです。あの頃、敗戦状態で闘うことができません、ほとんどの人が栄養失調状態からの戦死だったそうです。家に生きて帰れなかった父のことを思う

「お国のために戦死… 遺族になんて恐ろしいことを」

東京都杉並区・伊丹郁子さん



小学3、4年生の頃、袈裟を着て集まり、ききました。母は国防婦だったと思います。私父が導師を務め、盛大な人会として戦死された者が出ました。それが記憶しています。その後、戦死者がました。遺族の方にお話を聞かされた。次々と出て、忠魂碑の国のために戦死されたたくさんの僧侶が七条前での葬儀になっていたのだからあきらめてく

28歳で戦争未亡人となったらこんな状況から抜けられるの、あの悲惨な戦争が繰り返されないよう、私のような苦しみを味わう子どもが出ない世の中にしたいです。(神奈川県座間市・恵光寺門徒推進員、72歳)

「お国のために戦死…」と声を掛けていたそうです。しかし戦後、次兄がニューギニアで戦死したという知らせを受け取った母は「なんて恐ろしいことを言っていたのか。簡単にあきらめられることではない。わが身になれば、よくもまあ、あんなことを」と悔い、私も3人の息子がいますが、折に触れ、戦死した兄のことを話しながら、「戦争は絶対にダメ。70年間戦争のない時代が続いた重みを感じてほしい」と話しています。あの時代を経験したものでないとわからないことです。(三重県桑名市・浄光寺出身、88歳)